

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07257

研究課題名(和文) 18世紀後半フランスにおけるアメリカ論の展開 - 比較政治思想の観点から

研究課題名(英文) Political discourses on America in the second half of the eighteenth century
France

研究代表者

永見 瑞木(NAGAMI, Mizuki)

立教大学・法学部・助教

研究者番号：10780629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、18世紀後半のフランス社会における知的変容の複雑な諸相の一端を、フランスにおける同時代アメリカに関する政治的言説の分析を通じて明らかにすることにある。具体的には、コンドルセのアメリカ論の展開を、同時代の思想史的・歴史的・社会的文脈に位置づけながら、当時のフランスの知識人によるアメリカをめぐる言説空間の再構成を行った。さらに、フランス革命期のアメリカをめぐる議論の展開についての検討を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to clarify some aspects of the more complex process than has been assumed of the intellectual transformation in the second half of the 18th century France by focusing on the political discourses of the French intellectuals on America in this period. To achieve this purpose, the political thought of Condorcet on America was carefully examined and situated in the broader historical and intellectual context. I tried also to examine the diverse discourses on America from different point of view including those in the period of French revolution.

研究分野：西洋政治思想史

キーワード：政治思想 18世紀 フランス 米仏関係 コンドルセ

1. 研究開始当初の背景

本研究の着想の起源は、研究代表者が2015年3月に東京大学大学院法学政治学研究科に提出した博士学位請求論文「コンドルセの政治秩序構想：信念の根拠、アメリカ、地方議会」にまで遡る。

この博士論文では、18世紀後半のフランスの思想家であるコンドルセ(1743-1794)の政治思想を主要な研究対象とした。従来、18世紀フランス思想史の文脈において、コンドルセは「最後の啓蒙思想家」とも呼ばれ、革命期に執筆した最後の著作とされる『人間精神進歩史』が彼の思想全体を表すものと見なされてきた。こうした見方から導かれるのが、専ら真理や理性を信奉する楽観的な進歩観念の主張者という、一面的なコンドルセ理解である。そこで博士論文では、真理や理性に基づいて秩序を上から与えるプラトンの立法者としてではなく、人間の可謬性や社会の不確実性に目を向けた、漸進的改革者としてのコンドルセ像を提示することで、従来の一面的な理解を刷新することを試みた。

そのために注目したのが、18世紀後半のフランスにおける地方議会論という主題と、社会の改革を志向する当時のフランス人にとっての同時代アメリカ社会という参照項である。というのも、コンドルセの問題関心や政治思想の展開の全体像を十分理解するには、比較的知られている革命期の議論(とりわけ公教育論など)ではなく、むしろ革命前の1780年代から温められていた政治秩序構想を検討することが重要であり、それは改革構想としての地方議会論と同時代アメリカへの関心という二つの主題を軸としていたからである。アメリカ社会はコンドルセにとって、フランス社会の歩むべき方向性を照らし出す参照項となったが、アメリカとフランスの置かれた歴史的社会的条件の相違にも自覚的であったコンドルセは、フランス社会の改革は、地方議会の改革から始めるべきであると考えた。

これらの主題については博士論文の中核となる章でそれぞれ検討を行ったが、いずれも研究主題と関わる範囲での限定した扱いとなった。

しかしこれらはフランスの18世紀後半における王政から近代的共和国への移行に関わる思想的、政治的、社会的変化を理解する上で極めて重要な主題であり、相互に関連性も有していることが、博士論文の執筆作業の過程で明らかとなった。

そこで、これらの主題を今後引き続き研究課題とすることを考え、まずはコンドルセの視点を同時代人の同様の主題に対する様々な視点と比較し、さらに歴史的、思想史的コンテクストに位置づけ直すことでより相対化しながら、研究を進めていくことを構想した。

以上の経緯をたどり、本研究はこの二つの主題(アメリカ論と地方議会論)のうち、1

8世紀後半のフランスにおけるアメリカへの政治的関心という主題について、より発展させようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、「18世紀後半フランスにおけるアメリカ論の展開-比較政治思想の観点から」をテーマとする。具体的な目的として、次の三点が挙げられる。

(1) コンドルセ及びコンドルセが関わった知識人の共有する言論空間の再構成。これについては、コンドルセのアメリカ論の展開を、同時代の思想的、歴史的、社会的コンテクストを参照しながら、資料面での制約の範囲内でできる限り精緻に後づけることで、研究の精度をあげることが目指される。

(2) マプリのアメリカ論及びその背景についての分析と考察。『市民の権利と義務』(1789年)の著者であるガブリエル・ボノ・ド・マプリのアメリカ論を検討することで、コンドルセやテュルゴなど親アメリカ派とは異なる視点の存在を明らかにすることが目指される。

(3) フランス革命期のアメリカ論の展開についての分析と考察。すなわち、フランス革命期に、いかなる観点から、アメリカの政治制度の何が参照され、批判されたのかを明らかにすることが目指される。

本研究を通して展望されるのは、革命前の時代のフランス社会の変容の複雑な諸相である。そこには諸外国の知識人との豊かな知的交流のもとに、未来の政治社会の可能性を模索する活発な言論の空間が存在した。アメリカへの関心という視角からその一端を明らかにしようとするのが本研究の目指すところである。

3. 研究の方法

本研究は、基本的に三つの手順を踏んで進められた。

第一に、文献・資料(18世紀後半のフランスにおけるアメリカ論に関する一次文献、二次文献)の調査、収集。

第二に、収集した文献・資料の精査、読解、分析。

第三に、理論的、歴史的検討を通じて、より広い理論的展望を得ること。その際には、通時的、共時的な比較の視点を重視した。

上記2に掲げた三つの目的に関して、より具体的な作業は以下の通りである。

【平成28年度】

・上記2の目的のうち(1)と(2)に焦点を当てながら研究を進めた。

・文献・資料の調査、収集に関しては、平成

29年3月の二週間のフランス滞在の際に行った。

・コンドルセの議論の背景となる文脈や議論の空間についてのこれまでの研究の整理、資料の読解、分析と議論の再構成を行なった。コンドルセに関係する人物として特に注目したのは、テュルゴ、マツエ、フランクリン、プライス、ペイン、ブリッソなどである。また思想的方向性は異なるが、アダムズについても、その動向はテュルゴらにとって影響をもつため考慮に入れた。

・コンドルセとは異なる視点(マブリなど)からのアメリカ論についての研究の整理、資料の読解と分析を行なった。ここからは、アメリカを参照するにしても、問題となるのはアメリカの何を参照するのか(例えば、どの諸邦憲法を見習うのか)であり、その相違は考え方の政治的ヴィジョンの違いを浮き彫りにすることが明らかとなった。

【平成29年度】

・前年度に引き続き、文献・資料の調査、収集に関しては、平成30年2月から3月にかけての二週間のフランス滞在の際に行なった。

・上記2の目的(1)(2)に関しては、前年度だけでは甚だ不十分であったため、作業を継続して行った。

・コンドルセのアメリカ論について一区切りをつけるため、研究成果の報告の準備を行い、学会報告を行った。

・上記2の目的のうち(3)に着手した。具体的には、アメリカ建国期の重要な政治文書である『ザ・フェデラリスト』の受容に注目し、それがいつ、どのような形で同時代フランス人の間に伝えられ、彼らはそれに対していかなる関心を傾けたのか、といった点について調査、検討を行う予定であった。実際に、『ザ・フェデラリスト』は1792年、王制の崩壊の後に翻訳書が出されたが、その経緯や政治的含意などは、今後調査する必要がある。また人権宣言草稿をめぐる議論においてもアメリカは参照されたが、この頃の文脈と合わせた詳しい検討も、今後引き続き行っていきたい。

4. 研究成果

全体として、収集した文献・資料の整理、それらの研究史の中での位置づけ、実際の読解と分析に時間がかかり、理論的、歴史的考察を経たアウトプットの段階に至るにはなお時間を有することが判明した。

当初の予定よりも作業が遅れた理由は、平成29年度の6月以降、並行して進めていた博士論文の公刊の作業が大詰めを迎え、集中

して時間をかける必要があったためでもある(平成30年1月に出版)。ただし、1で示した通り、その作業は本研究の主題にも大きく関わるものであり、改めて博士論文で展開した議論を再検討する機会となった。

またこれまでの研究の成果として、コンドルセのアメリカ論について一区切りをつけ、平成29年9月には日本政治学会において、研究成果の一部を報告した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計1件)

永見瑞木「コンドルセの改革構想とアメリカ」、日本政治学会2017年度研究大会、2017年9月24日。

〔図書〕(計1件)

永見瑞木『コンドルセと光の世紀 科学から政治へ』、白水社、2018年、267頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永見 瑞木(NAGAMI, Mizuki)
立教大学・法学部・助教
研究者番号：10780629

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()